

# ベルマーク新聞 5月号

発行 公益財団法人ベルマーク教育助成財団 東京都中央区築地5-4-18 汐留イーストサイドビル7階 〒104-0045 電話 03-5148-7255(代表) 郵便振替口座 00100-7-56035  
大阪事務所 大阪市北区中之島2-3-18 朝日新聞大阪本社内 〒530-8211 電話 06-6231-0131 ダイヤルイン 06-6201-8031 ホームページ <http://www.bellmark.or.jp/>

## 2018 年度説明会始まる

5～6月、全国 95 会場で実施



東京・新宿で開かれた説明会では、来場者が体験発表などに真剣に耳を傾けていた＝NSビル30階スカイカンファレンスホール

ベルマーク運動の2018年度の説明会が5月から始まりました。今後、全国47都道府県の95会場で順次開催していきます。

開幕日の8日、東京は雨が降り出しそうな天気でしたが、会場の新宿・NSビル30階のスカイカンファレンスホールには、誘い合わせたPTAのお母さんたちなど300人を超す来場者が集まり、

熱気であふれかえりました。時間になっても会場を訪れる人波が途絶えず、開会を10分遅らせたほどです。入口に設けられたブースでは協賛会社のエスビー食品、クレハ、日本テトラパック、ファミリーマート、スミフルジャパンがパンフレットや試供品などを手渡しました。

開会後は、まずベルマーク運動のDVDが上映され、続いて協賛会社の

PR、ベルマーク財団の現状説明、運動の実務説明がありました。そして、昨年度30万点のマークを集め、2年連続東京都でトップとなった青梅学園の山下望施設長が体験発表しました。

この日は広島と福岡でも説明会が開かれ、東広島市立八本松小学校と二日市カトリック幼稚園のPTAから体験発表がありました。

説明会は今後、毎週火曜日～金曜日に、各日3～4か所で開催していきます。北海道から沖縄まで全国を回った後、6月22日の宮崎・延岡での説明会で閉幕となります。

説明会での体験発表の内容は、ベルマーク財団のホームページで順次、掲載していきますので、今後の参考になさってください。

## アフガニスタンに 16 軒目の寺子屋完成

日本ユネスコ協会連盟

公益社団法人日本ユネスコ協会連盟が進めている「アフガニスタン寺子屋プロジェクト」の、16軒目の寺子屋が、このほど完成しました。

アフガニスタンは識字率が低く、男性社会でもあるため、女性の教育が遅れています。日本ユネスコ協会連盟は2000年代初めから、女性が学び直すことのできる拠点としての寺子屋建設と識字や収入向上の学習プロジェクトを進めてきました。ただ同国の治安はこのところ悪化しており、最近ではモスクや学校などの人が集まる場所もテロの対象になるほどだといいます。今回寺子屋が建ったのはカブール県北部のミルバチャコット郡。1月にあった開所式では、多くの軍や警察が警戒する中、政府関係者や地域の長老など100人が参加しました。

建物の銘板には「この寺子屋は教育と平和をアフガニスタンでさらに進めるために、また日本との友好の絆を発展させるために以下の皆様の支援によって建設されました」とあり、また「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和の砦を築かなければならない」というユネスコ憲章の一節も刻まれています。

寺子屋事業はベルマークの友愛援助の対象です。銘板には「Bellmark」の文字もありました。

アフガニスタンの寺子屋では2017年度、15歳～45歳の600人以上が公用語のダリ語を受講し、日本ユネスコ協会連盟カブール事務所は3月に同国政府などによる「識字賞」を受賞しました。2018年度は、もう1カ所の寺子屋を完成させたい、としています。



ミルバチャコット寺子屋の外観

Executive Committee for the  
"World Terakoya Movement"  
(Secretariat: Nagoya International Center)  
Mitsubishi Corporation  
The Bellmark Foundation  
YASASHISA PLUS (ASAHI LIFE)  
ذهان مردم نشئت نما يد. (ماخذ: از اساسنامه یونسکو)  
"Since wars begin in the minds of men, it is in the

銘板のアップ。英語とダリ語で描かれています。「Bellmark」の文字も。

# 高松市立高松第一小、京都市立仁和小が 900 万点

「できる時にできる人ができることを」／地元町内会が大きな力に



「無理なく活動していくことが大切」と話すPTA本部役員の川田敦さん、松下明弘さん、入江由美子さんと平尾高王教頭（右から）＝高松市松島町2丁目の高松第一小

高松市立高松第一小学校（児童数 640 人）と、京都市立仁和（にんな）小学校（同 362 人）が、今年 3 月、ベルマーク累計 900 万点を超えました。いずれも地元の府県内では 4 番目の達成です。

◇

高松市の中心部にある高松第一小は、2010 年に近隣 3 校が統合して発足しました。四国では初の施設一体型小中一貫校です。ベルマーク運動には統合前の 1963 年から参加しています。

ベルマークは月 1 回の「リサイクル週間」に、牛乳パックやインクカートリッジなどと一緒に学校で回収。PTA の一斉メールで周知し、5～6 年生児童の「エコグリーン委員会」が回収の実務を担当しています。

仕分けと集計を担うのは PTA 保健体

育部メンバーで約 20 人。授業参観日などに作業時間を設け、一般の会員から助っ人役の「スポットボランティア」も募ります。年間で 5 万点前後を集め、ドッジボール、長机など、子どもたちに身近な備品類をそろえてきました。

PTA のスローガンは「できる時にできる人ができることを」。ベルマークの作業も参加しやすい環境作りに努めており、「学年を超えた交流ができてよかった」という感想が寄せられるなど好評だそうです。

昨年度まで PTA 本部役員（広報担当）を務めた入江由美子さんは「親子で一緒に取り組めて、目に見える結果を出せるのがベルマーク運動。それを多くの人に知ってほしい」。同じく本部役員（保健体育部担当）だった川田敦さんは、「中



「地域みなさんに深く感謝します」と語る鳥屋原校長とPTAの平野雅幸会長、前ベルマーク委員長の辰巳純子さん、同じく前副委員長の佐藤伊代さん（右から）＝京都市上京区御前通一条下ルの仁和小

高一貫の特色を生かして、中学でもベルマークに取り組みればよいと考えています」と話しています。

◇

京都市の仁和小は 1965 年からベルマークの収集を続け、2006 年に 800 万点を達成。その後 11 年半で 100 万点を積み上げました。クラスごとに回収箱を置き、子どもたちがいつでもマークを持ってこられるようにしています。インクとトナーの使用済みカートリッジ回収にも力を入れています。

最も大きな力になっているのは校区内に 78 ある町内会。毎年 9 月に PTA のベルマーク委員 22 人が手分けして各町内会長を訪ね、収集用の封筒を手渡します。封筒は回覧板と一緒に各家庭を回り、2～3 週間後に委員らが回収。年間に集

まるマークの 8 割ほどは、こうして地域から寄せられる分だそうです。

仁和小は明治の初め、京の町衆たちが資金を出し合って開設した「番組小学校」の一つで、来年創立 150 周年を迎えます。900 万点達成について、鳥屋原校長は「学校が愛されてきたことを実感します。PTA のみなさんが 50 年以上コツコツと積み重ねて来た努力が大きな成果を生み出した」と、歴代ベルマーク委員らの頑張りをたたえます。

PTA の平野雅幸会長は「学校に強い愛着と関心を持ち続けてくれている地域みなさんのおかげ。地域の協力で、子どもたちに役立つものを買ってあげられるのはとてもありがたい。900 万点の達成を広くお知らせして、次の 1 千万点につなげたい」と話しました。

## ベルマーク仕分け、「面白かった！」

岡崎市のボランティア「火曜会」が企画



3 月に開かれた愛知県岡崎市の第 33 回岡崎ふれあい福祉まつりに、ベルマークの仕分け体験コーナーが登場、多くの親子連れや子供たちで賑わいました。

市内で活動するベルマークの仕分けボランティアグループ「火曜会」が出展しました。会場の東部地域交流センターむらさきかんでは、仕分

けへの参加を促すチラシも配布されました。それを見て参加したという小学 2 年生の塚崎美湖（みこ）ちゃんは、「ベルマークは知っていたけど、数えたのは初めて。色んなマークがあってびっくり。面白かった」。

火曜会は 1980 年からマークの仕分けを続け、財団に全国から届く寄付のマークを整理するボランティア

の草分け的存在です。昨年度は 53 万点あまりを集計し、累計点数は 3,415 万点にもなります。

火曜会の代表でベルマーク大使も務める三田靖子さんは「メンバーの平均年齢は 70 代後半ですが、より良い方法を模索しつつ、色々な方と協力してこれからも続けていけたら」と思いを込めました。

## ASA が東大阪市のマーク収集に協力

東大阪市のベルマーク収集に、朝日新聞の販売所（ASA）が協力することになりました。大阪府の東大阪、八尾、柏原 3 市のエリアにある約 20 の ASA でつくる「大阪府中部朝日会河内ブロック会」が全販売所に回収箱を置き、新聞の折り込みチラシなどで約 4 万の購読者にマークの収集を呼びかけるほか、集金時など

に回収も手がけ、集まったマークを東大阪市に寄贈します。

今年 1 月から折り込みチラシで PR し、4 月以降、本格的に回収をスタートさせました。ブロック長を務める「株式会社あさひやまもと」の山本雅一社長が 3 月に市役所を訪れて「みなさんのお役に立てるよう、しっかり PR したい」と話す、野

田義和市長も「市の職員も頑張ってくれている。自分もマークがついている商品をチェックして集めています」とこたえました。

同市は自治体として全国で初めて 2015 年からベルマーク収集に乗り出し、累計 10 万点以上を集めて地元校や東日本大震災の被災校に寄贈しています。



握手する野田義和・東大阪市長（右）と大阪府中部朝日会河内ブロック会の山本雅一・ブロック長

# キヤノンのリサイクル一大拠点、完成

## エコテクノパークを見学



**多様なカートリッジ回収サービス**  
Various Cartridge Collection Services

キヤノンは、トナーカートリッジおよびインクカートリッジの回収を行っています。より多くのお客様に回収活動のご協力をいただけるよう、回収窓口への持ち込みや、専用の集荷回収箱の配付、訪問回収サービス、学校単位でベルマーク点数と交換できるベルマーク回収など、さまざまな回収サービスをご用意しています。

Canon collects used toner cartridges and ink cartridges. In order to gain the cooperation of more customers in collecting cartridges, Canon offers various collection services, including collection counters where customers can bring cartridges themselves, delivery of dedicated centralized collection boxes, door-to-door collection services, and Bell Mark collection in which individual schools can exchange cartridges for Bell Mark points.

(左) エコテクノパーク外観(右) ショールームでは普段見られない複合機の部品の展示もある(右下) ベルマークについて掲載されているパネル

キヤノングループの環境活動の発信拠点となる「キヤノンエコテクノパーク」を財団職員が見学しました。キヤノン株式会社が今年2月に茨城県坂東市に開所した施設で、キヤノン製品のリユースとリサイクルを行うキヤノンエコロジーインダストリー株式会社(本社・茨城県坂東市、荒井徹社長)が運営しています。

建物は、カートリッジのリサイクルや、使用済み複合機の再生を行う工場と、ショールームで構成されています。「クリーン&サイレント 資源生産性の最大化」がコンセプトだそうです。

### ◆80%以上の部品が循環

建物に入ると広々としたショールームが広がります。複合機を解体した部品やパネル展示のほか実験装置もあり、実

際に触って学ぶことができます。

まずは「トナーカートリッジ」のリサイクル過程を見学しました。回収したカートリッジは機械に自動投入され、プラスチック・鉄・アルミ・銅などのさまざまな材料を、磁石や風などを使って徹底的に分類されます。プラスチックは金属と異なり、溶かして不純物と分けることができずリサイクルが難しいとされていますが、キヤノンはとことん分別することでその課題を克服しました。

鉄・銅・アルミなどの材料は分別した後、協力会社に運ばれて他の製品の材料として利用されるなど、全ての材料を無駄にしません。部品と材料を合わせ、回収したトナーカートリッジの80%以上を循環させており、資源抑制量は累計

26万トンのものになります。

### ◆6~7割がベルマーク回収

インクカートリッジは分別から解体、粉碎、洗浄までの工程を機械で行い、リサイクルプラスチックにしています。

インクカートリッジの6~7割はベルマークの登録校や団体から届くものとのこと。工場にベルマーク専用の回収箱が届いたら、まずPTA ナンバーや個数を確認して中身を検品します。

その時、セロハンテープやオレンジキャップなどが付いているものが多いそうです。「空になったカートリッジは振ってもインクが漏れない仕組みなので、何もつけずにそのまま箱に入れてください」と担当者。テープなどは一つずつ手作業で外さなければならないからです。

オフィス向け複合機は、製造時期によってリユースかリサイクルに分け、分解して作業します。ネジ一本でも使えるものは残すため、リユース部品の再利用率は80%にも。最後に、新品製品と同レベルの厳格な検査を経て、Refreshedシリーズとして出荷されます。

### ◆小中学生の見学受け入れも予定

キヤノンは2011年から全国の小学校で環境出前教室を120回以上開催し、受講者は6,900人を超えています。

荒井社長はエコテクノパークについて「キヤノングループの環境技術を結集した環境活動の発信拠点。工場見学や教育イベントにも力を入れ、小中学生に向けた環境学習の場としてもご利用頂けるようにしていきたい」と話しました。

# ユニーが東日本大震災の被災地に 71 万点



集まったマークは大きいダンボール5箱分になった

ユニー株式会社(本社・愛知県稲沢市、佐古則男社長)は、2月に実施したベルマーク運動で集まった約71万点のマークを、4月6日にベルマーク財団に寄贈しました。ユニーでは東日本大震災以降、被災地への支援活動を継続しており、その一環として2012年以来全国のアピタ・ピアゴ192店舗でベルマーク運動に取り組んでいます。

協賛会社のキリンビバレッジ(ベルマーク番号54)が毎年ポスターや回収箱を提供。7年目を迎える今年は箱のデザインも一新しました。「ベルマークを集めて東北の子どもたちを応援しよう」のスローガンのもと、サ

ービスカウンターに回収箱を置いて客に呼びかけるほか、事務所や休憩室にも箱を置くなど、運動がユニー全体に根付いてきたといいます。客から店への意見の中には「子どもの頃から習慣で集めています。活用してもらえて嬉しい」との感想も入っており、ベルマーク運動への関心の高さを感じるそうです。

業務本部CSR部部長の花井彩由実さんは、「毎年この期間のために一年間ご家庭でマークを集めて下さるお客様もいらっしゃいます。今後も回収場所のひとつとして、東北の被災地の復興に向けた支援活動を継続していきたいです」と話しました。

# 48年連続で 100万円寄付

## ミズノスポーツ振興財団

ミズノスポーツ振興財団(水野明人会長)は4月、ベルマーク財団を訪れ、100万円を寄付しました。これで48年連続の寄付。その総額は8,950万円にもなります。

訪れたのは振興財団の内橋悟・事務局長、澤井文彦・同次長、協力会社ミズノ営業本部首都圏支社の河原修一さん、渡辺市子さん。内橋事務局長からベルマーク財団の中島泰・常務理事に目録が渡されました。

内藤事務局長からは開口一番、「毎年同じ額です

が…」と、これも毎年おなじみとなった言葉が漏れ、中島常務理事は「いやいや、それを続けていただいていることがすごいです」と応じました。その後、最近のベルマークでのお買いものの傾向が話題になり、「やはりサッカーなどのボールが多いです」と中島常務理事。そのほか直径1m前後のミニトランポリンの人气が最近上がってきているそうです。

寄付されたお金は災害被災校やへき地校の支援、スポーツ振興などに活用されます。



内橋事務局長(左)と中島泰常務理事

# 冷蔵庫や家具が目の前に倒れて…地震ザブトン VR

「揺れ体験教室」も各地で開催



⑤地震ザブトンは色の濃いじゅうたんの上を凄  
勢いで動く⑥座るときはしっかりベルトをして

椅子型の装置と二次元スクリーンの映像によって、地震をリアルに体験できる「地震ザブトン」と、さらに立体的な映像を見ることができる「地震ザブトン×VR」を、財団職員が見学、体験しました。

「地震ザブトン」は東京・府中に本社のある白山工業が販売・レンタルし、「揺れ体験教室」も各地で開いています。白山工業は地震や火山に関する情報を測り、システムを作って販売している会社です。ベルマーク財団主催の理科実験教室でおなじみの「Dr. ナダレンジャー」こと納口恭明さんが所属している国立研究開発法人・防災科学技術研究所も「地震ザブトン」を早くから導入しており、その社会的な活用にも取り組んでいます。

東京工業大学の翠川三郎氏（地震工

学）と広瀬茂男氏（ロボット工学）、白山工業が共同開発し、2011年に「地震ザブトン」が製品化されました。多様な地震観測記録データを使って正確な地震動が再現されます。最長で約3分間。揺れと、家具や食器が崩れる実写映像がうつる前方のスクリーンによってリアルな地震体験ができ、単なるアトラクションにならないよう工夫されています。「VR」は株式会社構造計画研究所と共同で開発しているところで、まだ販売されていません。

「地震ザブトン」が動くのは3畳四方のマット上です。スピーカーやプロジェクターを含めても必要なのは縦3.5畳、横4.5畳の広さで十分です。体験できる地震の種類も多く、過去に起きた直下型、海溝型、長周期地震、また1階か高層階かを選べるメニューもあります。室内専

用なので、100Wの電源とスペースさえあれば、実施できます。

「揺れ体験教室」は学校や企業、自治体に出向いて開催しています。幅広い年代を相手に6年間で350回以上、2万人以上が揺れを体験してきました。揺れの体験を中心とし、事前学習と体験後の考察がプログラムに組み込まれています。

この教室は、正しい地震対策の知識を身につけてもらうために開いています。地震が起きた時に、机の下にもぐるのは意外と難しく、事前に家具を固定して転倒防止をしておくことが大切であることに気づいてもらう必要があります。実際に訓練を導入した企業からは「家庭での準備がまず大切だと認識できた」「実際は『何もできない』ということを学べた』という感想がありました。

2013年には地域安全学会の技術賞

を、2016年にはジャパン・レジリエンス・アワード優秀賞を受賞し、防災・減災対策の実力を評価されています。

開発中の「地震ザブトン×VR」のVRは、バーチャル・リアリティの頭文字です。人間の五感などを刺激して、あたかも現実のような環境を作り出す技術です。ゴーグルを装着することで、人間より大きな家具が倒れて自分に迫ってくる様子を見ることができます。従来の「地震ザブトン」や起震車にはない体験です。揺れ方は、阪神・淡路大震災や東日本大震災、熊本地震などから選べます。

VR版はこれまで規制が厳しく小さな子供が体験することはできませんでしたが、今年2月上旬から7歳以降も体験できることになりました。商品化に向けて関係者の期待が高まっています。

## 元なでしこジャパン・丸山桂里奈さんデザインのTシャツ発売

アパレルメーカーの協賛会社ファインプラス（ベルマーク番号39）が、元女子サッカー日本代表（なでしこジャパン）の丸山桂里奈（marukari）さんがデザインした半袖Tシャツを発売しました。

丸山さんのオリジナルキャラクター『カリンコちゃん』は、雲をモチーフに「どんなときでも空を見上げるとそばにいて見守っていてくれる」というコンセプトで描かれています。

Tシャツのデザインは4パターン、各3色展開。サイズは幅広く着用してもらえるよう、大人用のXS～XLサイズが用意されています。いずれも定価1900円（税込み2,052円）で、ベルマーク点数20点がつきます。

全国のカジュアル衣料品店等でご購入いただけます。



## 漫画家2人に感謝状

喜田川まさゆきさん、つのださとしさん

ベルマーク新聞に長年にわたって漫画を掲載していただいた喜田川まさゆきさん、つのださとしさんのお2人に、ベルマーク財団は4月24日、感謝状を贈りました。

喜田川さんは、4コマまんが「ベルちゃん」で、時々の世相を映したストーリーを、愛らしいキャラクターによって表現し、紙面に彩をあたえてくれました。連載は1985年4月に始まり、紙による新聞の最終号となった2018年1月号まで、計366回にのぼります。

また、つのださんは、ひとコマまんが「ベルマークのひとコマ」で、時々の世相や季節感を一枚の絵で表現していただきました。1998年2月から始まり、同じく2018年1月号まで、計112回を数えました。

贈呈に際し、東京・築地の財団事務所を訪れたお2人は、「1回も休まず連載を続けたんだっただなあ」と、過去を振り返って感慨深げな様子でした。



喜田川まさゆきさん（左）、つのださとしさん

## ◎インクカートリッジとテトラパックはメーカーの回収センターに送って下さい

エプソン、キヤノン、ブラザーが実施しているインクカートリッジやトナーの回収と、日本テトラパックが実施している紙容器の回収につきましては、回収箱を必ず各社指定の回収センターにお送りください。財団で受け取ることはできません。

各メーカーの回収センターは、箱に住所が表記されている場合もありますが、たいていは住所が書き込まれた宅配便伝票と一緒に付いています。ご確認のうえ、必ずそちらに送るよう、お願いいたします。

財団あてに送られてきた回収箱は、結局は元のPTAに送り返されることとなります。そうすると、もう一度メーカー指定のセンターに送り直す必要があり、料金も手間も余計にかかってしまいます。どうかご注意ください。

## ◎財団見学

☆2月9日、東京都中野区の区立中野中学校（矢口仁校長）2年生11人。「総合的な学習」の一環で、社会貢献活動とは何かを聞き取り調査に。

☆2月21日、旅行業大手のクラブツーリズム（本社・東京都新宿区、小山佳延社長）千葉旅行センターの「エコスタッフ」25人。